公立夜間中学

「川口市立芝西中学校陽春分校」が2019年4月に開校しました！

この春、川口に全国で22年ぶりとなる公立の夜間中学校が開校し、多方面から注目を集めています。4月の入学式から2か月、本格的に授業に取り組み始めた学校で、現在の様子などをお聞きしました。

川口市立芝西中学校陽春分校　教頭　星野　泰久先生、日本語担当教諭　竹内　まゆみ先生

開校初年度にあたる今年度は、1年生47人（2クラス）、3年生31名（1クラス）が入学しました。生徒は、10代から80代までの幅広い年齢層で、日本を含め13か国の方が通っています。日本人30名、外国籍の方が48名、外国籍の中では中国の方が22名と最多です。5割強の方が市内在住ですが、他市町村から片道2時間かけて通っている生徒もいます。

1年と3年の学年編成は、生徒の希望により分けています。中学の卒業資格を取得し、日本語能力や各教科の学力をつけ、高校や専門学校などへ進学することを希望している方は3学年に在籍しています。3年生の31名中26名が外国籍の生徒で、母国で中学、高校、専門学校や大学を卒業している生徒も多くいます。1学年には学び直しを希望する日本人生徒が多く在籍し、入学時の数学の習熟度でクラスを2つに分けています。数学と英語は習熟度ごとに授業をするのが効率的なため、可能な限り分けて授業を行っています。現在、日本語の取り出し授業を行っている生徒は24人います。日常会話はでき、ひらがなも読めますが、書くのが苦手という生徒が多く、ペアワークで会話をしながら、話す・聞く・読むをバランスよく習得できるように進めています。今後は、受験に向けて面接の練習などもしていきたいと思っています。

現在、課題に感じていることは大きく2つあります。1つは受験への対応です。3年生だけでも日本語のレベルも含め、語学力と学力の個人差が大きく、これからの1年間でどのようにカリキュラムをこなし、全教科を受験レベルまで持っていくか、頭を悩ませています。2つ目は、教員の人数です。日本語担当の教員は1名しかおらず、工夫しながら対応しています。あわせて、先に述べたように、教科ごとに習熟度に分けて授業を行うにも、教員が足りず、今は授業のない教員がフォローに入ることで対応しています。教員でフォローできないところは、生徒同士で聞き合い、助け合い、日本語の苦手な生徒には日本語のできる生徒が自然と通訳に入っています。スマホの翻訳機能も上手に使い、学習のサポート役としています。

教科や日本語の学習とともに、外国籍の生徒には日本人の生徒とともに机を並べ授業を受けることで、日本のマナーやルールなども学ぶ良い機会になっています。年齢も国籍も越え、多くの刺激を与えあい、それぞれが補い合いながら、自分のできることを率先して行い、学習する姿を見ることができます。そして、仲間がいる良い意味での『居場所』となることも期待しています。課題は多いですが、生徒全員の「学ぶ意欲」の高さや熱量に後押しされ、教員側も試行錯誤の毎日です。

英語の授業中（1年生）

日本語をフォローしてもらいながら進路希望調査票を記入する3年生

3年　坂本　ポーンヌブパーンさん

私は来日して7年です。タイで大学を卒業していますが、やはり日本で学んでみたいという気持ちがずっとありました。夜間中学ができると知り、ぜひ日本の中学校で学んでみたいと思い、入学しました。タイの学校との違いを日々感じています。日本の方が、同じ教科でもわかりやすく、より深く教えてもらえます。先生も優しく、ちゃんと叱り、たくさん褒めてくださいます。健康診断は眼科、耳鼻科までしっかり診てもらい、驚きました。私はN2（日本語能力試験）をもっていますが、国語の授業を受け、日本人の国語と外国人が習う日本語の違いを知りました。今は国語にはまっていて、今年はN1を受験しようと思っています。クラスの仲間とも仲良くなり、とても楽しく毎日通っています。そして、ここで学ぶ私の目標は高校進学です。高校でさらに勉強することが私の夢です。

第14回

ミャンマー連邦共和国

藤江 ミィさん

埼玉県にゆかりがあり、現在県内や海外で活躍している方に出身国や現在暮らしている国の紹介をしていただくシリーズ「世界の国からこんにちは」。今回は、2020年のオリンピック・パラリンピックを1年後に控え、鶴ヶ島市がホストタウンになっている「ミャンマー連邦共和国」について、旧首都ヤンゴン出身で、現在さいたま市でミャンマービール日本総代理店として、ミャンマーのよいものを日本で知ってもらいたいと活動している藤江ミィさんにご紹介いただきます。

ミャンマーは東南アジアのインドシナ半島西部に位置し、南東はタイ、東はラオス、北東と北は中国、北西はインド、西はバングラデシュに隣接しています。縦に細長い形をしていて、面積は日本の1.8倍です。宝石の採掘も盛んで、ルビー、サファイア、ひすいなども多く採れます。ミャンマーは一年中暑く、雨季と乾季があります。気温の高いときは42度くらいになりますが、湿度が低く、カラッとしているので、あまり暑く感じません。日本に比べ、まだ緑も多く、木陰に入ると涼しく感じます。雨季にはスコールのような大雨が降ります。

新しい街と記念碑

ミャンマーでは約9割が仏教徒で、人口の13%がお坊さんといわれています。彼らは結婚せず、厳しい戒律を守って暮らしています。修行を積んだお坊さんは、人の悩みや未来が見え、正しい道に導いてくださるので、とても尊敬されています。タイ、ラオス、台湾などからも多くの方がミャンマーに修行に来て、仏教を学んでいます。ミャンマーの男性は一生のうち3度得度式（出家の儀式）を行います。5〜7歳くらいで1回、結婚前、結婚後と合わせて3回修行をします。修行中はお坊さんと同じように、朝と昼のみの食事で昼12時から朝5時までは絶食をします。女性は特に回数は決まっていませんが、私は今までに3度修行をしました。絶食中はヤシの一種が原料の黒砂糖と水は口にすることができます。しかし、修行中は不思議と空腹を感じません。お経を唱え、瞑想することで、心が落ち着き、たまっていたストレスが消えていきます。3〜10日くらい修行するのが一般的で、子どもは夏休みなどの長期休みに得度式を行うことが多いです。ミャンマーは「ほほえみ」の国と言われます。これは、修行を行い、お釈迦様の教えを守り暮らす人が多く、のんびりゆったりとした時間の中で生活しているからだと思います。ほほえみと共に、ミャンマーの子ども達の瞳の輝きはアジアーだと思っています。

実家の仏間で（一番右が藤江さん）

ミャンマーの黒砂糖

お米のつながり

ミャンマーの主食はお米です。大きなお皿にご飯をたくさん盛り、いろいろなおかずを取り、ご飯にのせて一緒にいただきます。ミャンマーでは手で食べ、外食ではお箸やスプーンを使います。エビや魚で作られたそぼろ状のものを、ふりかけのようにかけて食べます。また、お茶の葉と唐辛子やニンニクで味付けたレッペは、ご飯がいくらでもすすみます。ミャンマーの国民食と言われるナマズ出汁スープの麺料理「モヒンガー」もお米の麺です。ミャンマーは、第一次世界大戦後、イギリスの統治を受けていましたが、アウンサン率いるビルマ独立義勇軍に加勢した日本軍と共に戦い、独立の足掛かりができたと言われています。そのこともあり、第二次世界大戦後の食糧難で苦しむ日本へ、東南アジア諸国が食料の輸出を断る中、ミャンマーだけは日本へ有利な条件で米を輸出しました。1949年から日本がお米の自給をほぼ達成する1960年頃までのこのミャンマー米が日本の戦後の急成長を支えたとも言われています。

左がレッペ、右は揚げたミックス豆

願いが叶う「ゴールデンロック」

ミャンマーには2014年に世界遺産に登録された寺院が3つあります。その他にも、私のおすすめの場所はたくさんあります。3000を超える遺跡や仏塔があるバガンは一度訪れてほしい場所です。気球で空から遺跡群を眺めることもでき、空からのバガンの壮大な風景は圧巻です。また、「ゴールデンロック」は、崖の上に巨大な岩が乗っており、その岩は落ちそうで落ちない、見ると不思議なパワーを感じます。ゴールデンロックに行くためにはいくつもの山を越え、アップダウンのある道を進みます。道の脇は崖があり、道中ヒヤヒヤしっぱなしです。しかし、このゴールデンロックに一度行くと願いが叶うと言われており、多くの方が訪れます。さらに、3度お参りすると、大金持ちになれると言われています！ミャンマーに行ったら、ぜひお参りして、ご利益を授かってください。

ゴールデンロック